特集

お米のこれから

初夏以降、
急に騒がしくなったお米のこと。
徳島に住む人々には、
どれほど実感があるのだろう。
そして、ふと疑問に思った。
「生産量が他県より多いわけではない、
この場所のお米事情とは？」
お米を作る人、加工する人、
売る人、研究する人。
さまざまな人に会いに行ってみよう。
一番身近で大切な食材「お米」の
今を探ってみると、
これからが少し見えてきた。

米農家が考える「未来」とは

農業の担い手不足、機械などの投資額の負担増、
さらに米の消費量は右肩下がりと、
米農家には多くの問題が付きまとう。
それでも、米作りを生業とし続ける人々がいる。
彼らは稲作にどんな未来を見ているのだろう。

技術×アイデア×情熱＝新しい農業

最新機器を配備した大型ライスセンターで作業する堀江さん。ここでは主に米粒のサイズやカラーなどの選別を行っている。

有限会社 樫山農園 取締役
堀江佑輔さん

農林水産省が２０２２年に行った調査によれば、小松島市における水稲の作付面積は約８９１ヘクタール。県内最大規模の農業法人として、その多くを担っているのが、小松島市坂野町の『樫山農園』である。広大なガラス温室で栽培する糖度の高い［珊瑚樹トマト］で有名だが［泣く子もだまる米］と名付けた味わい深い米も主力作物の一つだ。

「1期目の水稲作付面積は、約80アールだったと聞いています。24期目の現在は約１００ヘクタール超、田んぼにして約９００枚分です。今後も増えていくでしょうね」と語るのは、取締役の堀江佑輔さん。リサイクル古着の大手チェーン店エリアマネージャーから転身し、農業を学んだ人物だ。異業種で培った視点や経験を生かした先進的な米作りに取り組んでいる。

「水田受託事業の開始以降、ずっと作付面積は右肩上がりの状態です。最大の理由は農家の後継者問題だと思います」。